

# オスティアの「性的」グラフィッティ

—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—

奥山 広規

## はじめに

グラフィッティ (graffiti) といえば、「引っ掻かれたもの」を意味し、即興的に、そして一時的な気まぐれで自発的になされるものである<sup>(1)</sup>。それがなされる場所、媒体は問われず、引っ掻くための道具も、ローマ人がしばしば持ち歩いていた鉄筆 (stylus) や鍵をはじめ、その辺の石など、丈夫でとがったものならば何でもよく<sup>(2)</sup>、誰でも作成できた。そうして記されたのはとりとめのない出来事や思い、伝言、メモなどの豊富なテキスト<sup>(3)</sup>、様々な図像<sup>(4)</sup>であるが、意味のない、あるいは意味を(我々が)理解できないものも多く、全体として大した内容ではない。ところがそれを日常性が故と捉えるならば、当時の人口の大半を占めていながらも研究の対象とすることが難しい「庶民層」、その実態に迫る可能性をもつ稀有な研究資料へと変わる。ポンペイに代表されるウェスウィウス関連遺跡での研究がよく知られているが<sup>(5)</sup>、本稿の舞台となるのは「オスティア」である。

オスティアは、紀元前4世紀創建のローマの植民都市である。ティベリス川河口に位置する首都ローマの外港でもあり、東西の人や物が行きかう極めて重要な舞台であった。遺跡となってからも稀有な存在で、良好に当時の町並みを残している。当然ながら世界中の研究者の注目を集めており、日本調査隊も2008年以来、建築、経済、社会、宗教、美術、住環境といった様々な観点から、都市オスティアの構造と人々の活動の解明に取り組んできている<sup>(6)</sup>。その一環として筆者は、グラフィッティに注目し、その手始めとして2017年から悉皆調査を行ってきたが<sup>(7)</sup>、ようやく調査に目途がつき、オスティア・グラフィッティの全体的な傾向を論じるに足るものとなった。そこで本稿では、オスティア・グラフィッティの中でも、「性的なもの」を扱う。「性的」グラフィッティは、まさに生々しい肉声を体現しており、庶民や日常へのまなざしとして論じるにふさわしい。さらには、ポンペイの事例があまりにも有名であるため<sup>(8)</sup>、時空間的に異なるオスティアの事例を検討することは、オスティア研究のみならず、グラフィッティ自体の研究に寄与するものとなる。

## 1 オスティアの「性的」グラフィッティ

オスティアのグラフィッティの総数は、データベース (Ostia-Harbour City of Ancient Rome (<http://www.ostia-antica.org/>)) の情報と筆者による調査成果を踏まえれば、62遺構から844点 (文字グラフィッティ516点、画像グラフィッティ263点、どちらとも分類できないその他65点)<sup>(9)</sup>である。「性的」グラフィッティは、性的な要素を含むカテゴリー、いわゆる「エロティカ (Erotica)」であり、テキストとしては、とりわけ異性、同性間を問わず、性愛、性愛を種にした侮辱など、画像では、まさに性行為そのものを表現したものや性器のモチーフからなり、オスティアでは5遺構から19点を数える (表1)。

表1 オスティアの「性的」グラフィッティ

遺構番号	遺構名	総数 (文字 : 画像)
I. iv. 2	Domus di Giove e Ganimede (ユピテルとガニメデの邸宅)	7 (5 : 2)
I. xii. 6	Terme di Foro (フォルム浴場)	1 (0 : 1)
II. v. 1	Caserma dei Vigili (消防隊の宿舎)	1 (1 : 0)
III. viii. 2	Terme Marittime (海岸浴場)	2 (2 : 0)
III. x. 1	Caseggiato degli Aurighi (戦車御者の集合住宅)	8 (8 : 0)
		19 (16 : 3)

5遺構19点は、他の遺跡と比べると非常に少ない。たとえばポンペイの有名な娼館 (VII. xii. 18-20) では、文字グラフィッティに限っても45点ほどあった<sup>(10)</sup>。オスティアではその長期性のために支持体が失われてしまったとも考えられるが、多くの漆喰とそのため多くのグラフィッティが残されているドゥラ・エウロボスで「性的」グラフィッティはまったくない (少なくとも記録されていない) ので<sup>(11)</sup>、オスティアの「性的」グラフィッティの少なさは、何か別な理由がある可能性が高い<sup>(12)</sup>。

ともあれ、オスティアの「性的」グラフィッティを論じるにあたって、本稿では、Domus di Giove e Ganimede の事例に着目する。事例点数が多く、文字も画像もあり、そして何よりも、この遺構は文献史料、碑文こそ欠いているが、建築学的に着目されており、コンテクスト把握が可能となっている。コンテクストを把握できないとグラフィッティは分析できない。これらのグラフィッティを分析することで、グラフィッティから Domus di Giove e Ganimede 自体を検討し、ローマ時代の当地に生きていた人々の実態の一端も明らかにできるであろう。

## 2 Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)

Domus di Giove e Ganimede<sup>(13)</sup>、すなわち「ユピテルとガニメデの邸宅」は、オス

ティア＝アンティカ遺跡の第1区域第4街区の一角を占めている。130年代建造の非常に大規模な複合住宅であり、インストラの一部でありながら中庭を有していた。1階部分は、庭を除いて約750 m<sup>2</sup> (約227坪) の広さを持ち、玄関ホール (28、図1の番号に対応、以下同じ)、廊下 (29)、廊下の拡張部 (30: the extension や the ala)、廊下からつながる部屋 (オスティア最大の部屋 (6.75×8.75×6 m (吹き抜け)) として知られている27 (the main reception room)、the small salon と呼ばれる33、主人のプライベートな空間とされる24、24の控えの間であり、アトリウム型住宅のタブリヌムと同種の空間と想定されている25 (24/25: the masters suite)<sup>(14)</sup>、トイレ、キッチン、バスルームを備えている34/35 (the service area)) から構成され、中庭 (26) を介して街区の庭 (11/21) と、裏口 (37) を介して附属タベルナ (36) ともつながっていた。2階 (あるいは中二階) の大部分も所有していたようで、そこには41 (40と共に the service area) の内部階段から登ることになる。建物自体は最大5階建てと考えられており、3階以上には外部階段 (38) が入り口となった。

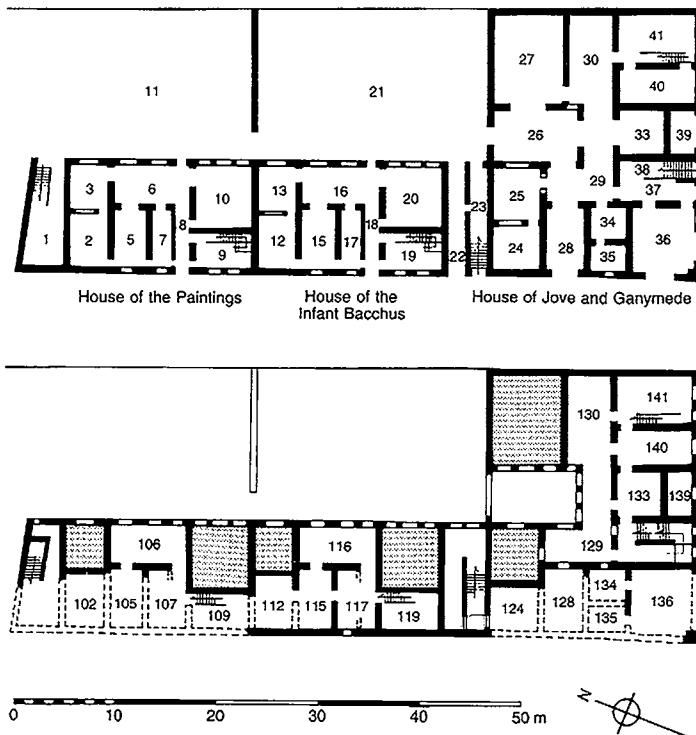


図1 Regio I. Insula iv. 2-4の平面プラン (ハドリアヌス時代、上: 1階、下: 2階)  
(DeLaine (1995), fig. 5, 2から転載)

オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)— (奥山)

この邸宅の、少なくとも建造段階の所有者は、オスティアで財政的・社会的に重要な人物と考えるべきであろう。大きな邸宅であることに加え(ポンペイでいえば、上位4分の1グループの高級住宅に分類)<sup>(15)</sup>、それが都市中心部(カピトリウム、クリアなどの付近)に立地していた。壮大な玄関ホールは、多くの来訪者を示唆している<sup>(16)</sup>、装飾は高品質である<sup>(17)</sup>。都市周辺に土地を所有するオスティアのエリート層や、時期的には、商業や遠方との交易で財を成した人の可能性が高い<sup>(18)</sup>。

所有者について、先ほど「建造段階の」と限定したが、それはこの邸宅が約150年間機能し、その期間内に構造、装飾、配置、用途などの各種変更があったためである(図2)。変更年代を細かく示すことはできないが、大体、3つのフェーズに分けられている<sup>(19)</sup>。

まずは、I「2世紀後半(～コンモドゥス帝暗殺(192年)以前)」。これは2世紀の後半、その中でもコンモドゥス帝が改名し、その死後廃止された月 Commodus

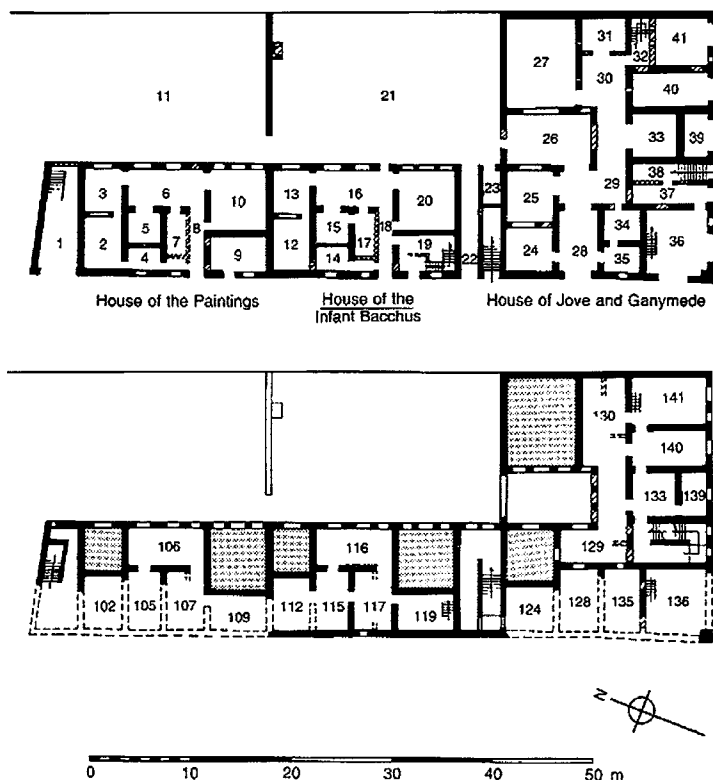


図2 Regio I. Insula iv. 2-4の平面図(セウェルス時代、上:1階、下:2階)  
(DeLaine (1995), fig. 5, から転載) ※壁の斜線部は封鎖部分

が廊下（29）の南壁に引掻かれた以前の邸宅の状態である<sup>(20)</sup>。この時に、部屋27の天井が引き上げられて吹き抜けになり、この邸宅の名のもとになったユピテルとガニメデの壁画が描かれた。裏口（37）が封鎖されることで、附属タベルナ（36）が独立し、また、40/41も独立することで、41にあった内部階段が32に移動した。中庭（26）はドアが設置されることで庭から半封鎖され、33に面する開口部も封鎖された。グラフィッティに関して重要なのは、廊下端に部屋31が新たに追加されたこと、33の装飾が変更され壁の地が「黄色い」部屋になったことである。

続く変更の段階は、Ⅱ「3世紀後半」。この時に、建造段階時のモザイクの修復、壁の封鎖による中庭と庭の分離、中庭への噴水の設置（封鎖部の正面）があり、そして白色の薄い漆喰が多くの壁画に塗布されて、新しい装飾段階の基礎となった。

最終段階は、Ⅲ「4世紀半ば以前」。この時までには、街区全体が放棄され、2～5mの瓦礫に覆われていた。ただ、人間の生活は継続し、瓦礫の上を新たなフロアレベルとして下層の人々が居住していたようである。

この邸宅の「性的」グラフィッティは、7点で、文字が5点、図像が2点である。この邸宅には「性的な」もの以外にも多くのグラフィッティが残存しているけれども（総計51点で、62遺構中4番目に多い。内訳は文字32点（数字15点、性的5点、日付3点、名前1点、人物関係1点、奴隷関係1点）、図像19点（人物5点、船5点、動物3点、性的2点、幾何学・植物モチーフ2点、競技関係1点、複合1点））、カテゴリー的には2番目に多い。「数字」はオスティアで最大の点数を擁するカテゴリーであるが、それに次ぐ「性的な」点数は、オスティア全体としても、遺構に限っても、特徴的なものである。通し番号を付けて、以下に提示しておく<sup>(21)</sup>。なお、提示されるグラフィットの識別について、便宜上、データベースのもの（G・・・）を援用している。

#### ① G0030、部屋31南壁

： *Hermadion cinaedus*<sup>(22)</sup>

「ヘルマディオンは稚児」



（Calza (1920), pp. 370-372, fig. 12から転載）

#### ② G0033 [1]、部屋31東壁、次の [2] と重複

： *Hic ad Callinieum futui | orem anum amicom mare ... | nolite in aede...*<sup>(23)</sup>

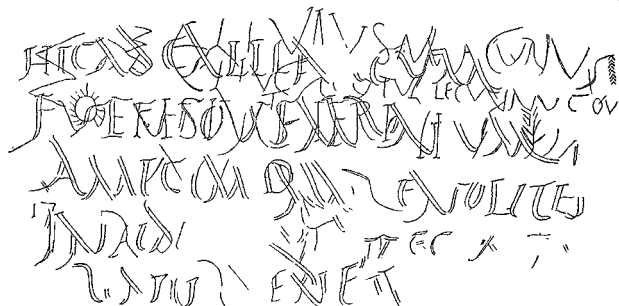
「ここカリニクスの場所で、友人のお口とお尻でやった・・・」

オステアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)— (奥山)

③ G0033 [2]、部屋31東壁、前の [1] と重複

： Livius me cunus | lincet Tertulle cunus... | Efesius Terisium amat<sup>(24)</sup>

「リウィウスがわたしのあそこをなめる・・・、テルトゥッレがあそこを・・・、  
エフェシウスはテリシウスを愛している」

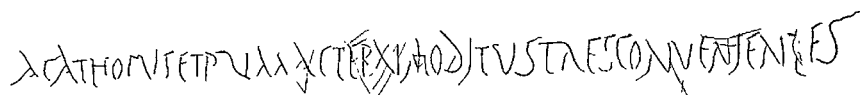


(Calza (1920), pp. 370-372, fig. 13から転載)

④ G0034、部屋31東壁 (筆者未確認)

： Agathopus et Primi(s) et Epaphroditus tres convenientes<sup>(25)</sup>

「アガトプスとプリムスとエラフロディトゥスが3人でまぐわった」

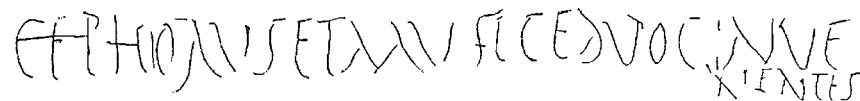


(Calza (1920), pp. 372-374, fig. 14から転載)

⑤ G0035、部屋31南壁 (筆者未確認)

： Nicephorus et Musice duo convenientes<sup>(26)</sup>

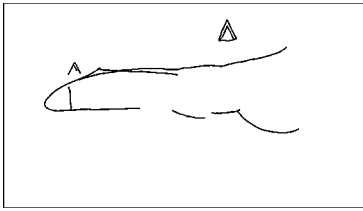
「ニケフォルスとムシケが2人でまぐわった」



(Calza (1920), pp. 372-374, fig. 15から転載)<sup>(27)</sup>

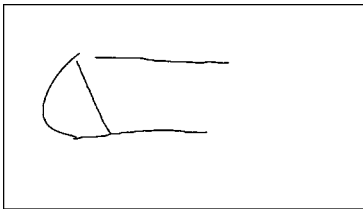
⑥ R33① (奥山 (2019)<sup>2)</sup>、部屋33東壁

： 性器 (ファルスとヴァギナ?) のモチーフ<sup>(28)</sup>



(奥山 (2019)<sup>2</sup>、89頁から転載)

⑦ R33⑥ (奥山 (2019)<sup>2</sup>)、部屋33北壁  
：性器（ファルス）のモチーフ<sup>(29)</sup>



(奥山 (2019)<sup>2</sup>、91頁から転載)

全体として、直接的な、つまり、はっきりと性愛的なものとなっている。直接的でない「恋愛的」事例は見受けられない。たとえば、①ではヘルマディオンを「稚児」、つまり男色家の受け身側と罵倒し、④では、「アガトプスとプリムスとエラフロディトゥスが3人でまぐわった」とある。図像も性器そのものを刻んでいる。分布でいえば、部屋31と33に集中しており、文字が31、図像は33に限定されている。そのため、31と33の両部屋に注目することになる。

31はⅠ「2世紀後半」時の改装時に廊下端に追加された部分で、装飾が白地に赤色の二重水平線、様式化されたエディクラのみの非常に簡素な部屋である（図3）。30との仕切り壁は貧弱で粗く、発掘者である Calza によれば入り口にドアはなく、カーテンがぶら下がっているに過ぎない<sup>(30)</sup>。機密性の低く、重要性の低い部屋と見なせよう。Ⅱ「3世紀後半」までに改装され、白色の薄い漆喰の塗布を受けたので、グラフィッティもⅠとⅡの間のものとなる。グラフィッティは23点で、「性的な」5点（上の①～⑤）のほか、文字4点（人物関係1点、不明3点）<sup>(31)</sup>、図像14点（人物5点、船4点、動物3点、競技関係1点、植物モチーフ1点）<sup>(32)</sup>である。「性的な」ものは明瞭に男性同性愛的であり、これは極めて特徴的であるものの、それ以外は極めて一般的な題材ばかりで、他の遺構と比べて注目すべきものはない。しかしながら、図像グラフィッティが密集している部分があり、非常に印象的ではある（図4）。

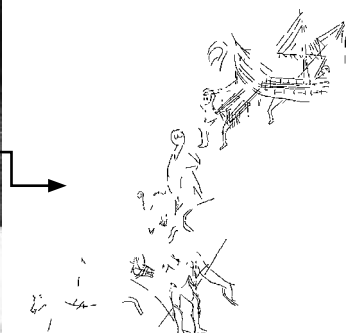


図3 (左) 部屋31 (ICCD (Italy's Central Institute for Cataloguing and Documentation), E040952)

図4 (右) 図像グラフィッティの密集 (筆者作成)

33は壁の地が「黄色い」部屋である。これもI時の改装によるものであるが、先述の31とは違って、地の黄色もさることながら、様式化された建築モチーフ、小さな風景画、植物モチーフ、悲劇マスクなどできちんと装飾されている(図5)。部屋25、27と並ぶ主要レセプションルームの1つであるので不思議ではない。しかしながら、この改装時に、唯一の光源である中庭からの光が遮断され、それとともに庭の風景を見ることができなくなったので、重要性は低下したと考えられる<sup>(33)</sup>(図6)。グラフィッティも18点(性的な図像2点のほか、文字14点(数字9点、日付2点、奴隷関係1点、不明2点)<sup>(34)</sup>、図像2点(船1点、複合1点)<sup>(35)</sup>があるが、他の遺構と比べて注目すべきものはない。「性的な」モチーフも単純で目立つものではなく、厄払いなどの深い意味はなさそうであり<sup>(36)</sup>、オスティアにおいて珍しいということしかできない。ここでもグラフィッティは、31のものと同様、白色の薄い漆喰の塗布の痕跡から、IとIIの間に年代づけられる。



図5 部屋33(「黄色い」部屋)(筆者撮影)





図6 部屋33から中庭（26）への眺望の封鎖（筆者撮影）

### 3 Domus di Giove e Ganimede と「性的」グラフィッティ

以上のコンテクストを踏まえて、この遺構に「性的」グラフィッティが刻まれた意味や果たしていた機能を考えていくことになる。そこでまず考えるべきことは、このグラフィッティが刻まれた時期のこの邸宅の用途であろう。というのも、この邸宅が「性的」サービスを受けられる高級ホテルと見なされてきたためである。これは発掘者である Calza によるもので、男性同性愛を特徴とする部屋31の文字グラフィッティに基づき、とくに男性同性愛者向けとされた。これは、部屋27のユピテルとガニメデの絵画分析による追認を受けており<sup>(37)</sup>、「かもしれない」との留保付きながら、データベースの項目の見解ともなっている。上述の②の「ここカリニクスの場所で(hic ad Callinicum)」によってカリニクスをこの管理人とする向きもある。

しかし、ホテル案については、DeLaine がすでに建築学的分析から否定している<sup>(38)</sup>。DeLaine は「性的」グラフィッティを強調しすぎていることにも言及しており、実際、総数から言えばそれ以外が多数である。また、Calza による刊行の数年後には、判読修正によって女性の存在が指摘されており（④:Primu(s) → Prima、⑤:Musice = Musica、Musicē ?）<sup>(39)</sup>、さらに、近年、Solin が②と③の精査による修正を公表したことで（②修正:Hic ad Callinicum | futui orem, anum | amice mi, amari[=e] noli ter | inde n[on] v[=b]ene [---] | donor [---]「ここカリニコスの場所で、下の口とお尻でやった、わが友人よ、やりすぎるといいことないぞ・・・」(図7)、③修正:Livius Mercurius (palm) | lincet Tertulle cunnu quam「リウィウス・メルクリウスがテルトゥラのあそこをなめる・・・」<sup>(40)</sup>）(図8)、より女性の存在が浮き彫りになっている。つまり、この部屋で性行為はあっただろうが、男性同性愛に限定する必要はないのである。

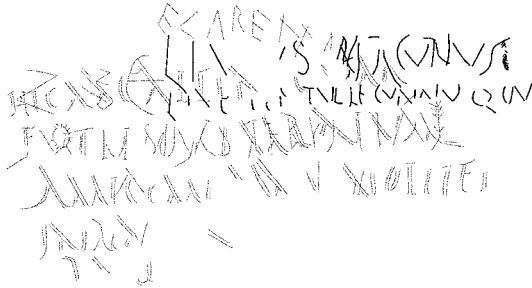


図7 ②の現状に基づいた修正図（筆者作成）

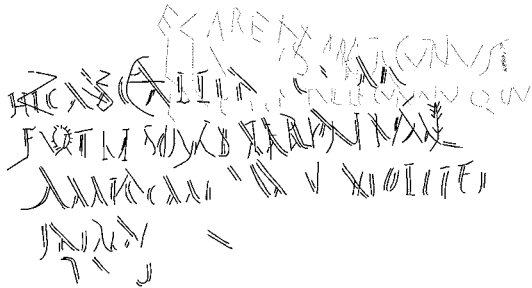


図8 ③の現状に基づいた修正図（筆者作成）

さらに、筆者は「ここ Callinicus の場所で (hic ad Callinicum)」を「Callinicus の寢床」として理解できると考えている。そうなれば、これが刻まれた部屋 31 は、少なくとも夜間は男奴隷部屋であったであろう。当該時期の Domus di Giove e Ganimede は、裕福な人物の家であり、複数人の家内奴隷が想定できる。ところが改装によって、37（裏口）の封鎖と附属タベルナ（36）の独立、40/41 の独立によって、家のスペースが小さくなったことで、奴隷用の部屋が不足したのではなかろうか。これが部屋31の追加の理由であり、その低い重要性和防犯意識の低さがそれを裏付けていると思われる。ちなみに、主人一家が寝ていたのは2階であり、女奴隷は1階の別の部屋であろう。女奴隷による男部屋との行き来は可能であり、性行為は不思議ではない。日中については、質素な部屋であるので、家内奴隷、訪問者の奴隷などの待機場所であったかもしれない。となれば、部屋31のグラフィッティの書き手は、奴隷の可能性が高くなる。

他方、部屋33は、グラフィッティこそ多いが、文字も図像もほぼオスティアで一般的なもののみで、発見以来注目されることはなかった。これは発掘者の Calza が

男性同性愛関係に注目しすぎたことに起因している。「性的」図像は、筆者による発見のためこれまで論じられていないが、単純な線刻であり、目立つものではなく、現時点で特記することはない。DeLaine が言及するように<sup>(41)</sup>、だらだらと過ごす場所での、単なる気晴らしの可能性が高いように思われる。その場合、部屋33は、訪問客の待機・対応場所にふさわしい。グラフィッティは訪問者を中心に、随伴奴隷、家内奴隷、さらには主人家族の手によるものとなろう。

## おわりに

本稿では、オスティアの「性的」グラフィッティを、Domus di Giove e Ganimede の事例から検討してきた。それは Domus di Giove e Ganimede をグラフィッティの観点から分析することでもあり、その結果、Domus di Giove e Ganimede は、「性的」グラフィッティが刻まれた時期において、「性的」、とくに「男性同性愛的」サービスの受けられるホテルではなく、建造時から引き続き裕福な人物の住居であったといえる。そこには主人一家のほか、複数人の家内奴隷も同居しており、彼らは簡易的な部屋で寝起きしていた。その一人がカリニクスであり、寝起きする彼らこそが「性的」グラフィッティの書き手の主要グループであったであろう。もしかすると他のグラフィッティの登場人物も、この邸宅の奴隷であろうか。そうであれば、各行為の時期的なスパンが問題となるものの、相当に性に乱れた部屋であっただろう。そのように意味深い「性的」グラフィッティであるが、ただそれは当事者たちにとって、単なる気晴らし、暇つぶしに過ぎない。「性的」以外のグラフィッティも同様であろう。これはグラフィッティを日常的行為とする場合であるが、もし、日常的に自由に書けなかったとすれば、可能性として、奴隷にも特別の自由が許され、楽しく陽気に祝われたサートゥルナーリア祭の自由さの証とできるかもしれない。奴隷部屋ではなく、訪問者などの待機場所である部屋33の事例であるけれども、マトロナへの擲楯は、その傍証と考えられる<sup>(42)</sup>。

最後に、以上の結論は Domus di Giove e Ganimede の「性的」グラフィッティのものであり、オスティア全体のものではない。オスティアの「性的」グラフィッティ全体を論じるには、Domus di Giove e Ganimede と並ぶ点数を持つ Caseggiato degli Aurighi の事例分析が欠かせない。実際、Domus di Giove e Ganimede にはなかった直接的でない「恋愛」事例も多く、「性的」といえども内容の質が異なっている<sup>(43)</sup>。しかしながら、分析の前提となるコンテキスト、とりわけ建築的情報が少なく、建築学と連携した現地調査から始めなければならない。今後の課題である。

## 参考・引用文献

- ・ Baird (2011): Baird, J. A., “The Graffiti of Dura-Europos: A Contextual Approach”, Baird, J. A., Taylor, C. (eds.), *Ancient Graffiti in Context*, London, pp. 49-68.
- ・ Baird (2012): Baird, J. A., “Dura Deserta: The Death and Afterlife of Dura-Europos”, Augenti, A., Christie, N. (eds.), *Vrbes Extinctae: Archaeologies of Abandoned Classical Towns*, Routledge, 2012, pp. 307-329.
- ・ Baird (2016): Baird, J. A., “Private Graffiti? Scratching the Walls of Houses at Dura-Europos”, Benefiel, R., Keegan, P. (eds.), *Inscriptions in the Private Sphere in the Greco-Roman World*, Leiden, Brill, 2016, pp. 11-31.
- ・ Berg (2017): Berg R., “Toiletries and Taverns. Cosmetic Sets in Small Houses, Hospitia and Lupanaria at Pompeii”, *Arctos* 51, 2017, pp. 13-39.
- ・ Berg (2018): Berg R., “Furnishing the courtesan’s house. Material culture and elite prostitution in Pompeii”, Berg, R., Neudecker, R. (eds.), *The Roman Courtesan. Archaeological Reflections of a Literary Topos* (Acta Instituti Romani Finlandiae 46), pp. 193-220.
- ・ Berg (2020): Berg R., “Hic Amor Habitat. Sex and the Harbour City”, Karivieri, A. (ed.), *Life and death in a multicultural harbour city: Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity* (Acta Instituti Romani Finlandiae 47), Rome, pp. 313-318.
- ・ Buonopane (2018): Buonopane, A., “Bullismo omofobico sui muri di Pompei?”, Giuffrida, C., Cassia, M., e Gaetano Aren, G. (a cura di), *Roma e i ‘diversi’. Confini geografici, barriere culturali, distinzioni di genere nelle fonti letterarie ed epigrafiche fra età repubblicanae Tarda Antichità*, Le Monnier Università, 2018, pp. 282-298.
- ・ Calza (1920): Calza G., “Gli scavi recenti nell’abitato di Ostia”, *Monumenti Antichi* 26, 1920, coll. 322-430.
- ・ Clarke (1991): Clarke, J. R., “The decor of the House of Jupiter and Ganymede at Ostia Antica. Private residence turned gay hotel?”, *Roman art in the private sphere*, Ann Arbor, 1991, pp. 89-104.
- ・ Cooley and Cooley (2013): Cooley, A., Cooley, M. G., *Pompeii and Herculaneum: A Sourcebook*, London, 2013 (2<sup>nd</sup> ed.).
- ・ DeLaine (1995): DeLaine, J., “The Insula of the Paintings at Ostia 1.4.2-4. Paradigm for a city in flux”, Cornell, T. J., Lomas, K. (ed.), *Urban Life in Roman Italy*, London, pp. 79-106.
- ・ DeLaine (1999): DeLaine J., “High Status Insula Apartments in Early Imperial Ostia - a Reading”, *Mededeelingen van het Nederlands Historisch Instituut te Rome* 58, 175-189.
- ・ DeLaine (2012): DeLaine, J., “Housing in Roman Ostia”, Balch, D. L., Weissenrieder, A. (eds.), *Contested Spaces. Houses and Temples in Roman Antiquity and the New Testament*, Tuebingen, 2012, pp. 327-354.
- ・ Falzone (2004): Falzone, S., *Le pitture delle Insulae (180-250 circa d.C.)* (Scavi di Ostia 14),

Roma, 2004.

- Falzone (2007): Falzone, S., *Ornata aedificia. Pitture parietali delle case ostiensi*, Roma, 2007.
- Falzone (2010): Falzone, S., Zimmermann N., "Stratigrafia orizzontale delle pitture delle case a giardino. Modello della fase originaria dei blocchi centrali del complesso ostiense", *Anzeiger: Österreichische Akademie der Wissenschaften* 145-1, 2010, pp. 107-160.
- Hermansen (1982): Hermansen, G., *Ostia. Aspects of Roman City Life*, Alberta, 1982.
- Langner (2001): Langner, M., *Antike Graffitizeichnungen: Motive, Gestaltung und Bedeutung*, Dr. Ludwig Reichert Verlag Wiesbaden, 2001.
- Leach(1997): Leach, E. W., "Oecus on Ibycus: Investigating the Vocabulary of the Roman House", in: Bon, S. E., Jones, R. (ed.), *Sequence and Space in Pompeii*, Oxford, pp. 50-72.
- Lohmann (2018): Lohmann, P., *Graffiti als Interaktionsform. Geritzte Inschriften in den Wohnhäusern Pompejis*, De Gruyter, 2018.
- Meiggs (1973): Meiggs, R., *Roman Ostia*, Oxford, 1973(2<sup>nd</sup>).
- McGinn(2002): McGinn, T. A. J., "Pompeian Brothels and Social History", McGinn, T., Carafa, P., de Grummond, N., Bergmann, B., and Najbjerg, T., *Pompeian Brothels, Pompeii's Ancient History, Mirrors and Mysteries Art and Nature at Oplontis, and the Herculaneum 'Basilica'* (Journal of Roman Archaeology Supplement 47), pp. 7-46.
- Paulo and Funari (1995): Paulo, P., Funari, A., "Apotropaic symbolism at Pompeii: a reading of the graffiti evidence", *Revista de História* 132, 1995, pp. 9-17.
- Solin (1967): Solin, H., "Graffiti di Roma e di Ostia", *Archivio paleografico italiano* fasc. 66 (= vol.5), Roma, 1967, tavv. 42-59.
- Solin (2020): Solin, H., "The Wall Inscriptions of Ostia", Karivieri, A. (ed.), *Life and death in a multicultural harbour city: Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity* (Acta Instituti Romani Finlandiae 47), Rome, pp. 319-332.
- van Buren(1923): van Buren, A. W., "Graffiti at Ostia", *Classical Review* 37, pp. 163-164.
- van der Meer (2012): van der Meer, L. B., *Ostia speaks: Inscriptions, buildings and spaces in Rome's main port*, Peeters, 2012.
- Varone (1994): Varone, A., *Erotica pompeiana: iscrizioni d'amore sui muri di Pompei*, "Erma" di Bretschneider, 1994(アントニオ・ヴァローネ著、本村凌二監修、広瀬三矢子訳、『ポンペイ・エロチカ ローマ人の愛の落書き』、PARCO 出版、1999年).
- Varone (2003): Varone, A., "Organizzazione e sfruttamento della prostituzione servile: l'esempio del lupanare di Pompei", Buonopane, A., Cenerini, E. (a cura di), *Donna e lavoro nella documentazione epigrafica. Acci del i Seminario sulla condizione femminile nella documentazione epigrafica*, Faenza, 2003, pp. 193-216.
- Varone (2005): Varone, A., "Nella Pompei a luci rosse. Castrensia e l'organizzazione della prostituzione e dei suoi spazi", *Rivista di studi pompeiani* 16, 2005, pp. 93-109.

- オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)— (奥山)
- ・Wallace-Hadrill (1994): Wallace-Hadrill, A., *Houses and Society in Pompeii and Herculaneum*, Princeton, 1994.
  - ・Wallace-Hadrill (1995): Wallace-Hadrill, A., “Public honour and private shame: the urban texture of Pompeii”, Cornell, T. J., Lomas, K. (ed.), *Urban Life in Roman Italy*, London, pp. 39-62.
  - ・青柳 (2004): 青柳正規, NHK「ローマ帝国」プロジェクト、『NHK スペシャル ローマ帝国2 ポンペイの落書き』, NHK 出版, 2004年。
  - ・奥山 (2018): 奥山広規, 「史料紹介 オスティア・グラフィッティ」, 『西洋史学報』44, 111-126頁, 2018年。
  - ・奥山 (2019)<sup>1</sup>: 奥山広規, 「2017年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」, 『西洋史学報』45, 79-102頁, 2019年。
  - ・奥山 (2019)<sup>2</sup>: 奥山広規, 「2018年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」, 『西洋史学報』46, 79-104頁, 2019年。
  - ・奥山 (2020): 奥山広規, 「2019年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」, 『西洋史学報』47, 119-147頁, 2020年。
  - ・奥山 (2021): 奥山広規, 「史料紹介 オスティア・グラフィッティ (改訂版)」, 『西洋史学報』48, 111-126頁, 2021年。
  - ・坂口・豊田 (2017): 坂口明・豊田浩志編, 『古代ローマの港町: オスティア・アンティカ研究の最前線』, 勉誠出版, 2017年。
  - ・堀 (2021)<sup>1</sup>: 堀貫賀編, 『古代ローマ人の危機管理』, 九州大学出版会, 2021年。
  - ・堀 (2021)<sup>2</sup>: 堀貫賀編, 『古代ローマ人の都市管理』, 九州大学出版会, 2021年。
  - ・本村 (1996): 本村凌二, 『ポンペイ・グラフィッティ: 落書きに刻むローマ人の素顔』, 中公新書, 1996年。
  - ・本村 (2004): 本村凌二, 『優雅でみだらなポンペイ: 古代ローマ人とグラフィッティの世界』, 講談社, 2004年。

## 後注

- (1) グラフィッティの概要については、Brill's *New Pauly*, s. v., Graffiti や Langner (2001), pp. 12-15などを参照。
- (2) グラフィッティの筆記具の実際については、実験考古学的な成果である Lohmann (2018), pp. 243-259が詳しい。
- (3) 具体的な内容は、ポンペイの事例であるが、本村 (1996) やその増補・改訂版である本村 (2004) のほか、青柳 (2004) において豊富に知ることができる。
- (4) 図像については、2500点もの事例を掲載し、分析を試みている Langner (2001) を参照。
- (5) 註3を参照。

- (6) 日本隊によるオスティア・アンティカ調査は、これまでに①科学研究費補助金基盤研究 (B)「古代ローマ都市オスティア・アンティカの総合的研究」(代表:坂口明(日本大学教授)、2008年度～2010年度)、②科学研究費補助金基盤研究 (B)「古代イタリア半島港湾都市の地政学的研究」(代表:豊田浩志(上智大学教授)、2010年度～2012年度)、③科学研究費補助金基盤研究 (B)「リバースエンジニアリングとしての建築史学、古代ローマ遺跡のソースコードを読み解く」(代表:堀賀貴(九州大学教授)、2013年度～2015年度)、④科学研究費補助金基盤研究 (B)「先端光学機器によるオスティア・アンティカ遺跡・遺物の文字情報調査」(代表:豊田浩志(上智大学名誉教授)、2017年度～2019年度)、⑤科学研究費補助金基盤研究 (A)「ポンペイとオスティア:古代ローマにみる建築術の総体としての都市と技術の大衆化」(代表:堀賀貴(九州大学教授)、2018年度～2020年度)があり、その成果は、坂口・豊田(2017)、堀(2021)<sup>1</sup>、堀(2021)<sup>2</sup>として刊行している。
- (7) 筆者によるこれまでのオスティア・グラフィッティ調査については、奥山(2018)、奥山(2019)<sup>1</sup>、奥山(2019)<sup>2</sup>を参照。
- (8) Varone(1994), Cooley and Cooley(2013). 我が国でも本村(2004)がある。
- (9) データベースを含めたオスティア・グラフィッティの全体像については、奥山(2018)と奥山(2021)を参照。
- (10) Varone(2003), Varone(2005).
- (11) ドウラ・ユーロポスとそのグラフィッティについては、Baird(2011)、Baird(2012)、Baird(2016)を参照。
- (12) この理由としては、オスティアで商業的な性的活動があったに違いないけれども、その詳細が不明であることと連関しているかもしれない。これはその建築的な特徴である石積みのベッドのシングルルーム(*cellae meretriciae*)の欠如のためであり(ある場所を娼館と識別する基準については、Wallace-Hadrill(1995), pp. 51-55やMcGinn(2002), pp. 8-11を参照。また、宝飾品、化粧用具、ランプ(性的なもの)などの物質的指標で性的活動の場の特定を試みるBerg(2017)とBerg(2018)も興味深い)、飲食店(酒場、レストラン)、ホテル、浴場などでの活動が推定されるばかりである(Berg(2020), pp. 314-316: 飲食店 = *Caupona di Alexander e Helix* (IV. vii.4)、3世紀に年代づけられる白黒モザイクの題材(2人の裸の男性ダンサー、鏡を持ったウェヌスと花輪やガードルを持ったクビドの隣接)から、ホテル = *Casa delle Volte Dipinte* (III.v.1)、廊下に面したシングルルームの列、*symplegma*(まぐわい)の絵から、浴場 = *Terme della Trinacria* (III.xvi.7)、性的なモザイク碑文(「*statio cunnulingiorum*」(舐めやさん事務所)から)。しかしながら、建築物として見出されないのは、1世紀のポンペイと2～3世紀のオスティアの間の性的慣習の変化の結果である可能性がある(Meiggs(1973), pp. 229-230; Berg(2020), pp. 314-316)。
- (13) この邸宅の詳細については、Calza(1920), pp. 354-375、DeLaine(1995)やDeLaine

- オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—(奥山)  
(1999), pp. 176-179を参照。遺跡における位置については、データベースのプラン  
(<https://www.ostia-antica.org/dict/1-plan.htm>) を参照。
- (14) DeLaine (2012), pp. 332-333. 家屋の部屋については、Hermansen (1982), pp. 17-24  
を参照。
- (15) Wallace-Hadrill (1994), pp. 72-82.
- (16) 玄関ホール (vestibulum) とその重要性については、Leach (1997), pp. 54-55を参照。
- (17) DeLaine (2012), pp. 332-334 ; Falzone (2010), pp. 132-134. 装飾については、Falzone  
(2004), pp. 61-74 ; Falzone (2007), pp. 107-110が詳しい。
- (18) オスティアのエリート層については、Meiggs (1973), pp. 189-211を参照。
- (19) DeLaine (1995), pp. 88-99とその情報源である発掘報告書 Calza (1920) を参照。I  
については、Clarke (1995), pp. 91-92も参照。
- (20) G0027 : VII KAL COMMODAS (7月、あるいは8月26日)。このグラフィットにつ  
いては、van Buren (1923), pp. 163-164を参照。
- (21) Domus di Giove e Ganimede 以外の事例について、ここで簡単に示しておく。遺構や  
その部屋の詳細、参考文献については、データベースのそれぞれの項を参照されたい。  
(1) Terme di Foro (I. xii. 6) : ① G0078 (部屋 18の床面、筆者未確認) : 性器 (ファ  
ルスとヴァギナ) のモチーフ?。現在データベースには図像の解釈について何の言  
及もされていないが、リニューアル以前は「Erotica」に分類されており、ここでも  
それを踏襲している。データベースのリニューアルについては奥山 (2021) を参照。  
(2) Caserma dei Vigili (II. v. 1) : ① G0122 (廊下 41西壁) : Perfixi 「突っ込んだ」。③  
Terme Marittime (III.viii. 2) : ① G0445 (部屋 5南東壁、筆者未確認) : Cinedus  
pedicatur | CESAR ECROTA PV 「女々しいやつ、犯され男・・・」、② G0853 (部屋  
5南東壁、筆者未確認) : Σεκύνδᾱ + οἰφ[---] | K A T 「セクンダはセックスした(?)」。  
(4) Caseggiato degli Aurighi (III. x. 1) : ① G0313 (中庭 (部屋 11) 北側廊下南壁、  
下にファルス図像?) : Colonia | lingit, set quit | lingit, nescio, cunnu[m sc. lingit ?] 「コ  
ロニオはなめる、彼は何をなめるのか、知らない [、あそこだよ? ]」、② G0280 (部  
屋 17西 壁 ) : [---] Ianuaria nugas es | vidus scripsit | [---] IMISS [---] VIISTI NII  
IIOVS | C R O VIIST | AMATOR || [---] AII NIIVA [---] IIS | [--] AC | [---] N 「イア  
ヌアリアは軽薄だ、捨てられ男が書いた・・・」、③ G0293 (部屋 17、筆者未確認) :  
Cruseros amas adama | Apella Cruside . Iustus Ianuar...us | plurima 「クリュシスよ、  
君はクリュセロスを愛しているが、しかし彼はアペッラに夢中。ユストゥス・イア  
ヌアリウスからごきげんよう、ごきげんよう」、④ G0299 (部屋 17、筆者未確認) :  
Pupa v(a)le sal(utem) 「かわいいちゃん、こんにちは、ごきげんよう」、⑤ G0302 (部  
屋 17、筆者未確認) : Mulus amet paticam 「オスラバがメス豚を愛すべし」、⑥  
G0253 (部屋 28北壁) : Hic Amor | (h)abitat 「ここにアモールは住んでいる」、⑦  
G0854 (部屋 28北壁、報告者未確認) : Quinque irru[matores?] 「5人の喉淫者(?)」、



- ⑧ G0855 (不明：収蔵庫保管、報告者未確認)、同じ壁に5回の繰り返し：recte futui「正しくセックスした」、5点中1点のみ recte futui X V [---]「・・・、5デナリウス」。
- (22) Calza (1920), pp. 370-372と Clarke (1991), p. 93は「Ti Eermadion」と判読しているが、名前と cinaedus の組み合わせが一般的で、代名詞はつけないので (Buonopane (2018), pp. 285-286)、1文字目と2文字目を併せて H とし、筆者は Hermodion と判読している。Solin (1967), TAV. 57a も留保付きで Hermadion としている。
- (23) Calza(1920), pp. 370-372.
- (24) Calza(1920), pp. 370-372.
- (25) Calza(1920), pp. 372-374.
- (26) Calza(1920), pp. 372-374.
- (27) Calza の図において冒頭の NI は欠けているが、データベースの Taylor の図では表現されている。
- (28) 奥山 (2019)<sup>2</sup>、89頁。
- (29) 奥山 (2019)<sup>2</sup>、91頁。
- (30) Calza(1920), pp. 373-374 ; Clarke(1991), pp. 93-94.
- (31) 人物関係：G0845、不明：G0032 (旧データベース、現在は削除)、G0846、G0847。
- (32) 人物：G0036c、G0036f、G0036g、G0036i、R31① (奥山 (2019)<sup>2</sup>)、船：G0036d、G0036e、G0706、G0712、動物：G0036a、G0036b、G0036h、競技関係：G0029、植物モチーフ：G0031 (旧データベース、現在は削除)。
- (33) DeLaine(1995), pp. 90-91 ; DeLaine(1999), p. 183.
- (34) 数字：G0031、G0032、G0707、G0708、G0709、G0710、G0711、R33③ (奥山 (2019)<sup>2</sup>)、R33⑤ (奥山 (2019)<sup>2</sup>)、日付：G0025、G0487 (奥山 (2019)<sup>2</sup>)、奴隷関係：G0023、不明：G0024、G0484② (奥山 (2019)<sup>2</sup>)。
- (35) 船：G0024 (船の情報について現在は削除)、複合：G0026 (人物と船)。
- (36) グラフィッティにおけるファルス画像の厄払い機能については、Paulo and Funari (1995) を参照。オスティアのグラフィッティ以外のファルス全般については、Berg (2020), pp. 313-314が詳しい。
- (37) Clarke (1991).
- (38) DeLaine (1995), pp. 104-105 (n. 42).
- (39) van Buren (1923), p. 164.
- (40) Solin(2020), pp. 326-327. 図7で表現しているように筆者は2行目末の am、ひいては quam 自体の判読に疑念を持っているが、このグラフィットの解釈に影響はない。なお、van der Meer (2012), p. 53は、②を HIC AD CALLIN[I]CUM | FUTUI OREM ANUM AMICOM [...] RE NOLITER IN AEDI [...] (ここカリニクス (の家) で私は友人のお口 (と) お尻でやった。この家にもう来てはならぬ (?))、③を

オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)— (奥山)

LIVIVS ME CUNNUS | LINCET TERTULLE CUNNU OV [---] | EFESIUS TERPSILLA  
AMAT (リウィウスが私のあそこをなめる、テルトゥッラのあそこをなめる; エフェ  
シウスはテルプシッラを愛している) と修正し、刊行している。

(41) DeLaine (1995), pp. 104-105(n. 42).

(42) G0023 (部屋33東壁) : Η | ματρώνα | περίψη | μά σου (奥様は卑しい僕)。

(43) 註21を参照。

(徳山工業高等専門学校一般科目・准教授)